

パネルディスカッション



メインテーマ： 自然と共に歩む明日をつくろう

サブテーマ： 自然の叡智、つながり・ひろがり・これから

- 「愛知万博と海上の森について」
- 「里山、里海と人の暮らしについて」
- 「次世代による環境を考える取組について」

左記の各分野からパネリストを迎え、さらに10月3日に行われたグループディスカッションの内容も踏まえたパネルディスカッションを開催しました。

ディスカッションの結果は、コーディネーターの川井秀一先生により「第9回フォーラム宣言」として提案され、会場の皆様の拍手によって採択されました。

コーディネーター



川井 秀一

Shuichi Kawai

京大大学院総合生存学館 学館長

日本木材学会会長、日本材料学会副会長等を歴任するなど、林産科学・木質工学の分野で数々の業績を残している。木材利用の普及啓発活動にも積極的に取り組み、日本木材学会の「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を前身とした「NPO法人の木」を立ち上げ、木づかい、森づくりの環境ネットワークづくりに取り組んでいる。

コメンテーター



マリ クリスティーン

Mari Christine

あいち海上の森センター 名誉センター長

父親の仕事に伴い4歳まで日本で暮らし、その後ドイツ、アメリカ、イラン、タイ等諸外国で生活。単身帰国後、上智大学国際学部比較文化学卒業。大学在学中に芸能活動も開始。94年東京工業大学大学院理工学研究科社会工学専攻修士課程修了。今現在も都市工学を学んでいる。幅広い視点から国際会議・式典等の司会、講演活動を多数こなす。

アドバイザー



田中 隆文

Takafumi Tanaka

名古屋大学院生命農学研究所 准教授

2000年より現職に就く。2003-2004年 James Cook大学(豪州)熱帯雨林研究センター客員研究員。三重大学生物資源学部非常勤講師。森林水文学・砂防学が専門であり、砂防学における「知の野生化」研究会を主宰する。著書に「環境問題はイメージでは解決しない。」「水を育む森」の混迷を解く』がある。

パネリスト



浦井 巧

Takumi Urai

NPO法人海上の森の会理事長

1951年兵庫県生まれ、1974年京都府立大学農学部林学科卒業、同年より愛知県に勤務。2001年から3年間、愛知県国際博推進局で海上の森を担当。2006年あいち海上の森センター所長、2011年愛知県農林水産部技監などを歴任し退職。2013年愛知県農林公社理事長、特定非営利活動法人海上の森の会理事長に就任。現在、愛知県陶磁器工業協同組合常務理事



印南 敏秀

Toshihide Innami

愛知大学地域政策学部教授

1952年、愛媛県新居浜市の海辺に生まれる。武蔵野美術大学卒業後、日本観光文化研究所、京都府立山城郷土資料館、愛知大学教養部・経済学部をへて、現在愛知大学地域政策学部教授。日本民具学会・日本民俗学会・日本生活学会理事などを歴任。現在は豊橋市に住み、海里山文化・食文化・入浴文化を研究テーマにしている。専門分野は、生活文化学



水野 翔太

Shota Mizuno

名古屋わかもの会議総合統括

1994年愛知県名古屋生まれ。20歳、法政大学法学部政治学科3年。高校1年の時にCOP10(生物多様性条約第10回締約国会議)にて名古屋ブース等の企画・運営を最年少で務めた後、学生環境団体NEOを創設。その他、中部エネルギー市民会議呼びかけ人、僕らの一歩が日本を変える。運営、小布施若者会議の運営等を務める。現在は東京の大学に遠いながらも愛知・名古屋のこれからの可能性を探る「名古屋わかもの会議」を創設、総合統括を務める。中日新聞「Risa」にて「名古屋わかもの会議・水野翔太の 未来にカケル」を連載中。愛知大学地域社会デザイン総合研究所協力研究員

■コーディネーター 川井秀一

今年ちょうど 2005 年の愛・地球博の開催から数えて 10 年目の節目に当たります。愛・地球博は自然の叡智が大きなテーマであり、その原点となったのは、海上の森です。この保全が大きな課題となり、開催の 1 年前に、海上の森の会が発足し、そして開催の翌年にはあいち海上の森センターが開設されました。いわば、森の会は市民からのアクションであり、そしてセンターは行政からのアクションであったと考えます。

このフォーラムも愛・地球博の継承事業として、その理念と成果を受け継ぎ 2007 年から開催しています。本日は第 9 回となり、いよいよ来年最終大会を迎えることになります。

■コメンテーター マリ クリスティヌ

本当に、10 年があつという間に過ぎてしまった感じです。万博の瀬戸愛知県館が今の海上の森センターとなっていますが、この海上の森センターというのは、造ったときに、もう今の形にするための設計をして、そして 3 階、4 階部分は木材の再利用を考えた建物です。

木材は万博の後、豊田市内の学校の校舎に再利用されていて、持続可能という理念が実践された、非常に意味深い建物だと思います。

NPO、NGO のいろいろなグループが愛知万博をきっかけにして、その後ずっと続く活動をしていることが 2005 年のレガシーの一つだと思います。人づくりをずっとつないでこられたということで、本当に素晴らしいことです。

■コーディネーター 川井秀一

本日、広場で開催している市民の EXPO や、10 月 3 日に開催した、市民活動の発表会もフォーラムの一つとして行っております。田中先生にその活動発表会についてご紹介いただきたいと思います。

■アドバイザー 田中隆文

10 月 3 日に開催された活動発表会・意見交換会と、それに先駆けて行われました「地球未来こども塾」について報告します。

「地球未来こども塾」は中日新聞が小学 6 年生を 100 人公募して開催する ESD 事業です。今年は里海をテーマに、自然生態や伝統文化を学び、ミッションに取り組んで、そして海と人間がどう関わるかについて検討して、素晴らしい発表をしてくれました。

それから、活動発表会では、活動した 8 団体にその成果を発表していただきました。そして、この 8 団体にも参加していただいて、意見交換会ということで議論していただき、結果を発表していただきました。

これらの発表を総括し、「日々見つめ、生かす暮らしとのつながり」というキーワードを報告したいと思います。

■コーディネーター 川井秀一

それでは、パネリストの皆さまに話題提供をいただいたうえで、『つながり・ひろがり・これから』という未来に向かってどのように実践していくのか、議論を深めていきたいと思います。

■パネリスト 浦井 巧

海上の森の会は、平成 16 年に設立、平成 21 年に NPO 法人に移行しております。海上の森の自然や文化を守り育てるために活動するというので、五つのグループに分かれて、それぞれの分野で活動しています。今、会員は 110 名ぐらいです。

里山は人が関わって初めて里山になることから、いろいろな団体とか企業が関わって、緩やかな連携の中で里山を保管理していく「里山コミュニティ」の形成を目指しています。自然環境の保全をベースにしなが歴史や文化を取り入れ、それからいろいろな方の参加交流を受けて、人と自然の共生を取り続けながら、未来に海上の森を引き継いでいきたい、と考えております。

■パネリスト 印南敏秀

海・里・山というものがいかに有機的に総合的につながり、そしてそれが生活を守っていたのか、あるいは生活といかに深く関わっていたか考えていただきたいです。

人が手を加えることによって身近な自然景観が作られてきましたが、今はかなり荒れてきているように思えます。海・山・里は総合的に見ていかないと、全体的な多様性とか、持続性というのは維持できません。高度成長期に物質循環が中断したものですから、今は山が荒れ、そして景観が悪くなっていると考えています。

新たな創生のためには、伝統的な知恵を発掘して学ぶ必要があるでしょうし、また、科学知識を加えて、海・里・山の自然というものをきちんと考える必要があると思います。

■パネリスト 水野翔太

若者が環境へ興味を持つきっかけはたくさんあると思います。環境を考えていくために、自分ごととして捉えることがまず重要な一歩になるのではないかなと思います。

環境を考える上では多角的な、包括的な視点で物事を見ることですが、すごく重要だと思いますが、そういう視点から考えられるように、名古屋わかもの会議というものを開催しています。全国から若者 100 人が集まり、愛知、名古屋について考え、若者の思いを発信するために活動しています。

■コーディネーター 川井秀一

『ひろがり』という意味で、海上の森の会の活動の広がりはいかがでしょうか。

■パネリスト 浦井 巧

森の会の活動では、一般の参加者に年間 1700 人ぐらい来ていただいております、それに関わるスタッフも、延べ 1800 人ぐらいになります。

課題は、いかに若い人に入会していただくかということです。もう一つは定年をむかえた方、そういう人たちにもどんどん加わっていただきたいと思っております。

■コーディネーター 川井秀一

マリさん、海上の森センターと会の関係を活性化し、更により広がりを持たせるためにどのようにお考えでしょうか。

■コメンテーター マリ クリスティーン

やはり自治体主導での関わり方ではなくて、むしろ会の皆様がた民間でいろいろな形で広げていただけることがすごく重要だと思います。もっと市民の方々に参加していただけるような環境をつくっていただくと、センターも生かされるのではないかと思います。

■コーディネーター 川井秀一

市民の方にセンターのさまざまなリソースを十分に活用してもらいながら、また海上の森の会と一緒に活躍できる場があるでしょうね。

水野さん、わかもの会議がセンターあるいは海上の森を活用することがあるでしょうか。

■パネリスト 水野翔太

実際、わかもの会議を海上の森センターでやりたいと思っております。環境について、海上の森という現場でフィールドワークを行う形で開催してみたいと思っております。

■コーディネーター 川井秀一

名古屋わかもの会議の総括をされていますが、わかもの会議が全国にあるのですか。

■パネリスト 水野翔太

全国にわかもの会議というものが、存在していますが、つながりは全くないです。わかもの会議という定義もそもそもないのですが、地域のことを考えているイコールわかもの会議のような形です。

■コーディネーター 川井秀一

どんな方が関わっておられますか。

■パネリスト 水野翔太

メンバーは高校 1 年生から大学 4 年生まで、20 人ぐらいいます。応援してくださる協賛企業が 10 社ぐらいありますし、また愛知県や名古屋市から後援という形で、応援していただいております。

■コーディネーター 川井秀一

主体的に捉えられるような活動を自分たちがやりたいんだ、実際にやるんだという、そういう人たちの集まりだそうですね。

■パネリスト 水野翔太

興味分野はみんなばらばらで、ぶつかることも多いですが、多様な意見が出るということもあって、やはりそれも多角的な視点という意味ですごく役に立っていたりします。

■コーディネーター 川井秀一

海上の森で何かイベントを打ち上げていただくと良いかもしれません。

■パネリスト 浦井 巧

ぜひやっていただきたいと思います。若い力で、若い感性でいろいろな新しいことにチャレンジしていただければ、一緒になってやっていきたいと思います。

■パネリスト 水野翔太

もちろん動くのは自分たちが自発的に動きますが、プラス大人から「一緒に手をつないでやろう」という場を増やしていけたらいいなと思います。

■コーディネーター 川井秀一

若者はエネルギーを出して、力を出して、シニアのほうは知恵を出して、お金を出して、そして一緒にやっぺいこうという、そういうことですね。

印南先生、宮本常一先生の写真を見せていただきましたが、人と自然の関わり方のバランスをどのように考えたらいいのか、お聞かせください。

■パネリスト 印南敏秀

お見せした写真は昭和 30 年頃の写真ですが、当然その前もあるわけで、自然と人の関わりは常に変化しつつあるわけですから、あの写真が全てというわけでもありません。ただ、人が自然には、その時々いろいろな関わり方があり、そういう中で日本人の歴史や文化があった。ニコルさんがおっしゃられた、日本の自然は非常に多様であると。それはやっぱり人間がそういう自然

を生み出してきたと言えると思いますね。

それは、その土地土地でまた違うはずだし、だから、単に生物多様性だけじゃなくて、文化多様性というか、いろいろな側面から多様性というものを考えていかないと、単純化してしまうということが、一番危険なことなのではないかと思います。

■コーディネーター 川井秀一

われわれの歴史や文化も大切に初めて自然が守られるということでしょうか。

今の海上の森はいい形で自然と折り合いをつけながら共生的な山になっているとお考えでしょうか。

■パネリスト 浦井 巧

田、畑とその周辺の森林を一体として整備や活動に利用しています。

それから、里山の文化といいますか、もうなかなかやらなくなった暮らしの年中行事も再現していこうということで、手掛けております。里の維持管理も含めて、全体としてある程度完成された里山保全活動ができていないかと感じています。

■コーディネーター 川井秀一

先ほどから文化や伝統の継承が自然との関係で非常に大切だというお話があります。この文化の中でも食文化というのはそれぞれの地域で随分と個別、多様性があって、食べ物を通じて、生物の連関を学んでいくことも大変重要かと思いますが、特に教育に関連してお話しいただけますでしょうか。

■パネリスト 印南敏秀

奥三河のほうでハチノコを捕って食べるという、そういう文化がありますが、今はハチノコ自体も非常に危機的状況です。雑木の山も全部植林してしまいましたので、そういったハチすら満足に捕れなくなっています。

多分、皆さんが考えられている以上にいろいろな問題がいっぱいあるのですが、なかなか情報をキャッチできないし、反対に発信する側もそれをうまく伝えるということが難しくなっているのではないかと思います。

学校でも同じです。学生が環境問題とかいろいろな問題を、当然のことながら見たり聞いたりして知っているだろうと思いますが、実は届いてないということですね。だから、届け方を相当工夫しないと難しいと思います。

■コーディネーター 川井秀一

知識も、技術も世代をうまくつないでいくことが問われているのかもしれないね。

■パネリスト 印南敏秀

そうですね。若い人たちに届けるためには、経験だけを言うのではなく、そこに科学性が必要です。調査研究で得た経験値を通して、数字だったりいろいろな形で説明しないと。

■コーディネーター 川井秀一

いよいよ未来志向の『これから』ということについて少し議論を進めてまいります。

水野さん、わかもの会議のこれからの夢を語っていただけませんか。

■パネリスト 水野翔太

誰もが当事者意識を持てる社会をつくりたいと思っています。自分たちの地域であったり、文化であったり、環境であったり。そういう未来に向けて周りの人から少しずつ地味に地道に巻き込んでいくことが、すごく重要だと思います。

■コーディネーター 川井秀一

このわかもの会議は、皆さんどのようにして連携を取っておられますか。

■パネリスト 水野翔太

メディアとしては SNS が一番大きいです。チラシとかは作らず、Facebook、Twitter、ホームページを使っています。

■コーディネーター 川井秀一

近代兵器を使って、ときにおいて自然の中で体験するというのをやっていただければいいかなと思います。

■パネリスト 水野翔太

そうですね。やっぱりフィールドを見なくちゃいけないと思います。どれだけ頭がいい人でも、考えるだけでなく、やはり自分の目で見るのが一番重要だと思います。

■コーディネーター 川井秀一

印南先生、『これから』というところで、将来、どのような運動をしたいとお考えですか。

■パネリスト 印南敏秀

環境だけではなく、先ほどの食とかと組み合わせながら、総合的に対策を取っていかないと、運動にならないだろうと思います。

今、魚食を調査し続けています。日本は魚の種類も、魚料理の種類も実に多様でしたが、家庭における魚食料理がほとんどなくなるなど、今、大変な危機です。

海のほうに行きますと、これまで捕れたものが全く捕れない。捕れていなかった所で突然捕れ始めるとか、海の状況、環境が随分変わってしまっています。だから、少なくともいろいろな魚食の文化というものを記録しておけば、どこか別の場所で伝わるのではないかと思い始めています。つまり、これからは日本全体とか、あるいは世界のどこかで、という大きな広がりの中で文化を考えていかなければいけないのではないかと考えています。

■コーディネーター 川井秀一

ありがとうございます。浦井さん、お願いします。

■パネリスト 浦井 巧

自然との関わりがだんだん希薄になってきた。ですので、自然と向き合う、自然を感じる、そうした感性を養うプログラムもどんどんやっていきたいです。

もちろん子どもだけではなくて、大人の方にも体験していただき、それを伝えていただきたいと、思っております。

文化との関わりという点では、四季折々の祭りなんかも、復活することも大事だろうと思います。

最後に紹介したいのは、去年、ESD の関連で募集された自由俳句で、大臣賞をもらった小学校4年生の子どもさんの作品です。

『できること、関心もつこと、動くこと』

いい言葉だと思います。

■コーディネーター 川井秀一

できること、関心持つこと、動くこと。

先ほどの主体的にやりたいという、わかもの会議の話と、実際に実践するんだと。

なるほど。ありがとうございました。

『つながり、ひろがり、これから』ということで、さまざまな人と自然と、そして文化、こういうものを次世代につないでいく、そのために若者の参加も大変重要だと思います。

また、これを継続していくためには、市民の力と、行政、企業、さまざまな人が連携を持って進めていく必要があります。

人と自然の未来に向けて、これからもまた一緒に考えさせていただきたいと思います。

どうもありがとうございました。



市民のEXPO 出展団体紹介

「市民のEXPO」と題して、自然環境関係団体、企業等による体験ブースやポスター展示等を行いました。

市民のEXPO 出展団体

- | | | | |
|---------------------|--------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|
| ① アジアの浅瀬と干潟を守る会 | ⑦ Forest House | ⑭ 愛知県森林保全課森と緑づくり推進室森林里山再生グループ | ⑲ オーガニックフラワー45+の会 |
| ② tre punte (トレプンテ) | ⑧ 口論義・森あそび応援隊 | ⑮ 愛知県林務課木材利用推進グループ | ⑳ 尾張自然観察会 |
| ③ 愛知淑徳大学エコのつぼみ | ⑨ あいち海上の森センター | ⑯ 磯部楽打天晴倶楽部 | ㉑ 株式会社伊藤園 |
| ④ NPO法人愛・地球プラットフォーム | ⑩ あいち海上の森大学同窓会 | ⑰ NPO法人海上の森の会 | ㉒ 株式会社豊田自動織機 |
| ⑤ スローライフ研究会 | ⑪ あいち自然環境団体・施設連絡協議会 (あいち自然ネット) | ⑱ NPO法人才の木 | ㉓ 中日新聞社 |
| ⑥ Yoga Rainbow | ⑫ 愛知県環境部自然環境課 | ⑳ NPO法人東海自然学園 | ㉔ 認定NPO法人JUON NETWORK (樹恩ネットワーク) |
| | ⑬ 愛知県シェアリングネイチャー協会 | ㉑ NPO法人山の幸染め会 | ㉕ みどりのまちづくりグループ |





第9回 フォーラム宣言

私たちは、これまで開催したフォーラムを通じて、里山が人と自然をつなぎ、地域づくりの場として重要であることや、自然を持続的に利用する生き方の大切さを学んできた。また、森林・里山から里海まで、自然が密接なつながりを持ち、人間の活動が与える影響を十分に考慮して行動することの大切さを再確認した。

愛・地球博開催から10年にあたるこのフォーラムでは、豊かな自然を次世代に引き継ぎ、持続可能な社会を実現するための取組について議論した結果、以下の宣言を行う。

- ① 身近な自然とふれあい、自然に対する感性を磨くことで、“いのち”を大切にすることを育み、持続可能な社会づくりの実現につなげる。
- ② 伝統的な生活の知恵に学び、人を取り巻く自然と暮らしとのつながりに理解を深め、現在の暮らしを見つめ直す。
- ③ 環境問題を自らのものと捉え、社会全体の意識の向上を図り、わかものの積極的な行動をとともに広げる。
- ④ 市民と行政、企業の連携により、愛・地球博から続く10年の取組を未来に向けて継続し、人と人、人と地域、人と自然のつながりが実感できる明日を創造する。

今後これらを広く発信し、全ての世代が当事者である自覚を持ち、具体的に行動していくことを約束する。



平成27年10月24日 第9回人と自然の共生国際フォーラム参加者一同



第9回
人と自然の共生国際フォーラム

The 9th international Forum on Interrelationship between Nature and Human Beings
第9届 人与自然和谐共处国际论坛 | 제9회 사람과 자연의 공존 국제포럼 | 9º Fórum Internacional de Convivência entre o Ser Humano e a Natureza



人と自然の共生国際フォーラム実行委員会

事務局：あいち海上の森センター

郵便番号 489-0857 住所 瀬戸市吉野町304-1

TEL 0561-86-0606 FAX 0561-85-1841 E-メール kaisho@pref.aichi.lg.jp

人と自然の共生国際フォーラム

検索

www.mu-academy.jp/forum